LEGEND OF REYON DARK SIDE
STUDIO MAX

裏川日レ伝

PREFACE

今日は、２１世紀最初の本です。
この本は当初“真リヨン伝“よりもハード（スケベ）な内容のモノを提供したい。といったコンセプトで企画したのですが海堂の怠慢によって今回の原稿が不足するといった事態に陥ってしまいました。その為に真リヨン伝Ｖ用の原稿をこちらに回すハメに・・・。（おかげでＶは落ちてしまいましたが）あぁ自己嫌悪。

２００１・８・１２　　海堂　司

CONTENTS

7　束縛　・・・・・海堂　司

23　暴虐の宴　・・・・・深澤　さくら

　　イラスト　・・・・・海堂　司

39　OVA新リヨン伝説

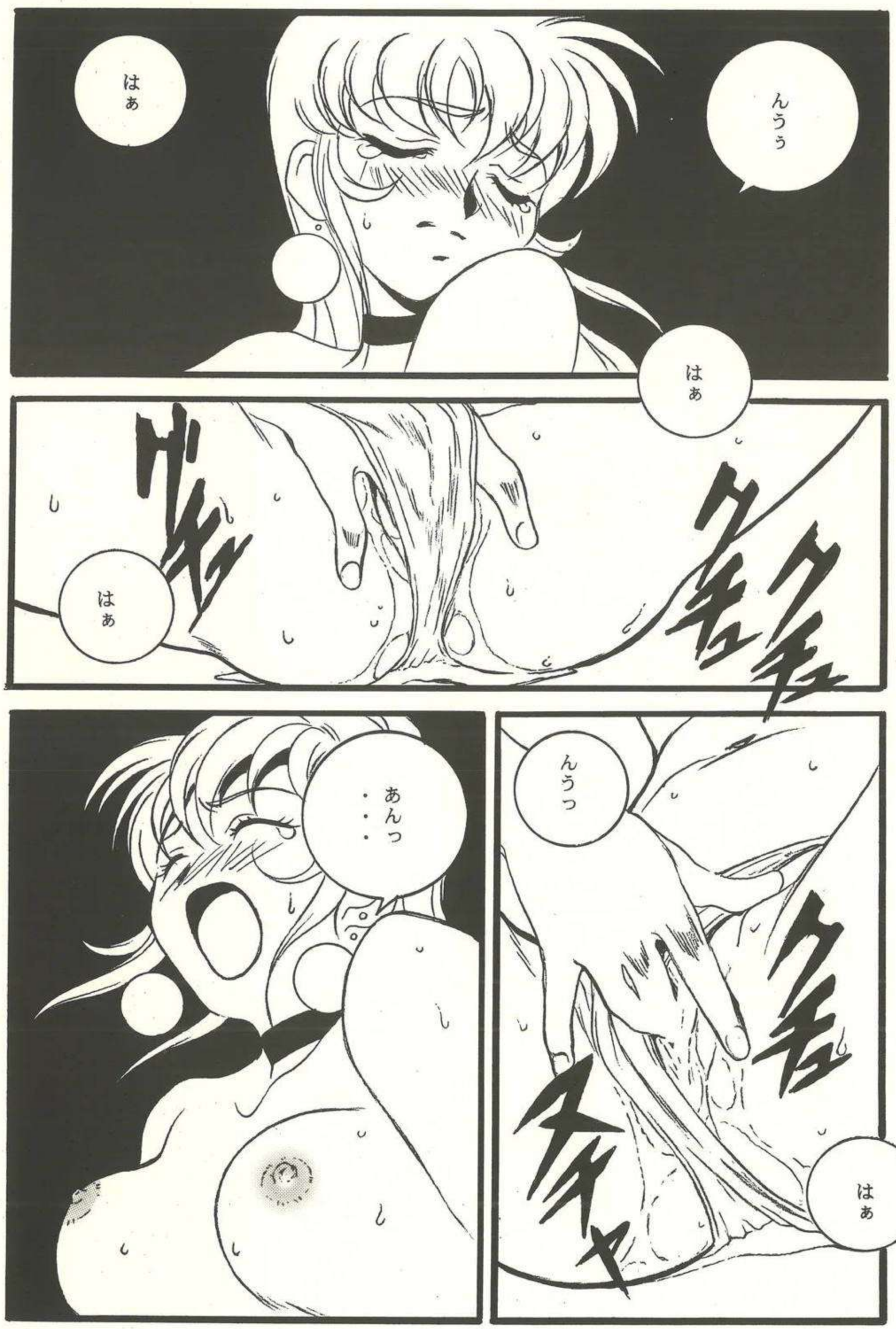
45　イラストギャラリー・・・・・鈴木　竜也

裏リヨレ伝

束縛

海堂　司

お兄様が
好き・・・


んうぅ
はぁ
はぁ
はぁ
ゲキ
ゲキ
んうっ
はぁ
あんっ・・・

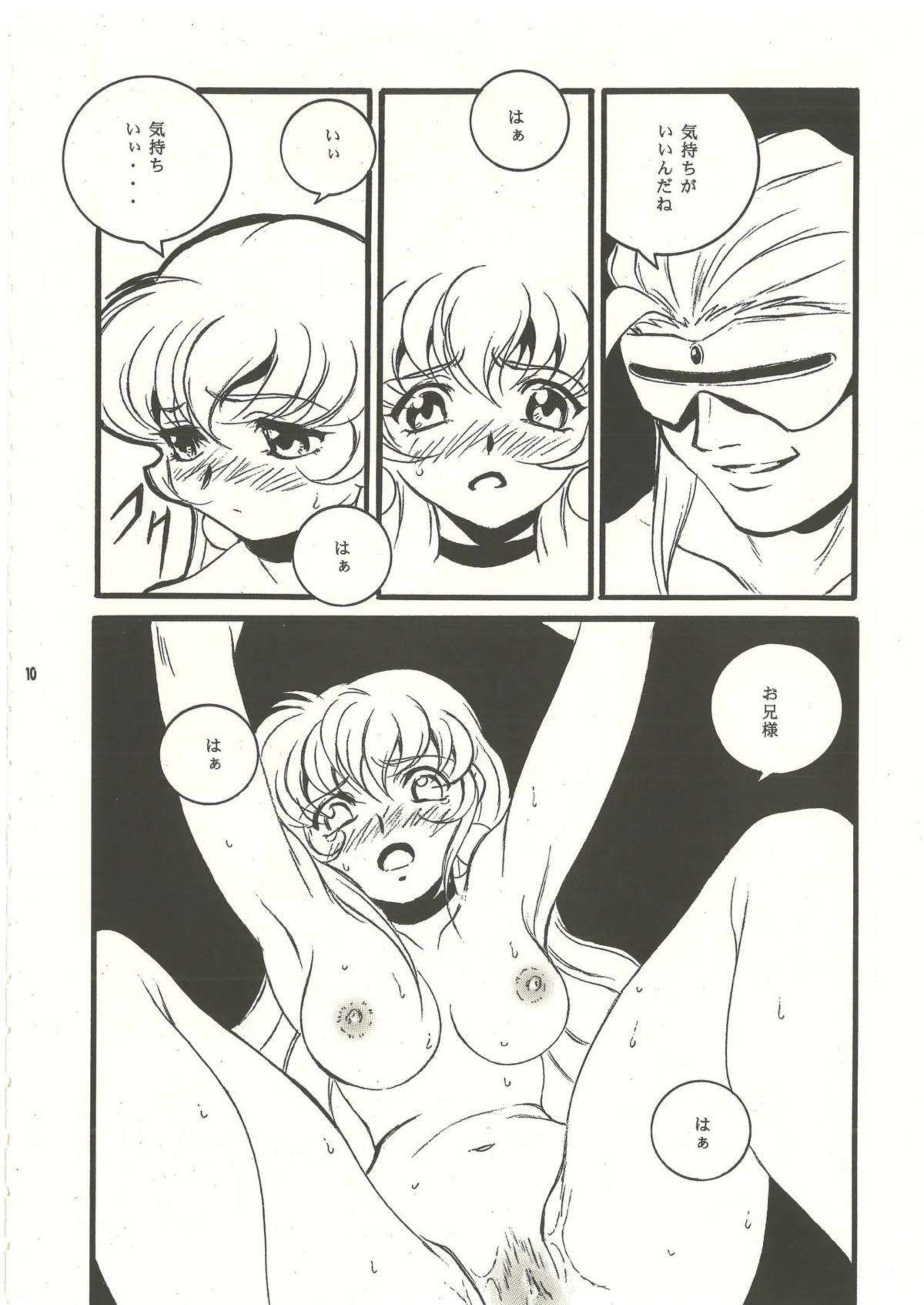
お兄様
変なの
フレア変なの
・・・

いいの？

こんなになって
いいの？

腰が浮いて
いるの

あぁ
いいんだよ


気持ちがいいんだね
はぁ
いい
気持ちいい・・・・
はぁ
お兄様
はぁ
はぁ

フレア口で奉仕してくれ
はぁ

うん

れろ
ちゅぱ
ちゅぱ
ぐちゅ
ぐちゅ
んっ・・・・

んうっ
ちゅぱ
ちゅぱ
ペロ
ペロ
そうだ
いい気持ちだよ
フレア
もっと
ねっとりと
舐めるんだ
ペロ

ガチャ
ガチャ
ガチャ
やんっ
あっ
お兄様
そこは・・・・

優しくしてあげるからだいじょうぶ

お利口だから少し我慢をするんだ

はぁ

はぁ

痛いっ！
痛いよー
いやぁーっ
お兄様ぁーっ

いやあぁーーーーっ

ズズズ

ジーク
なんかに
渡すものか

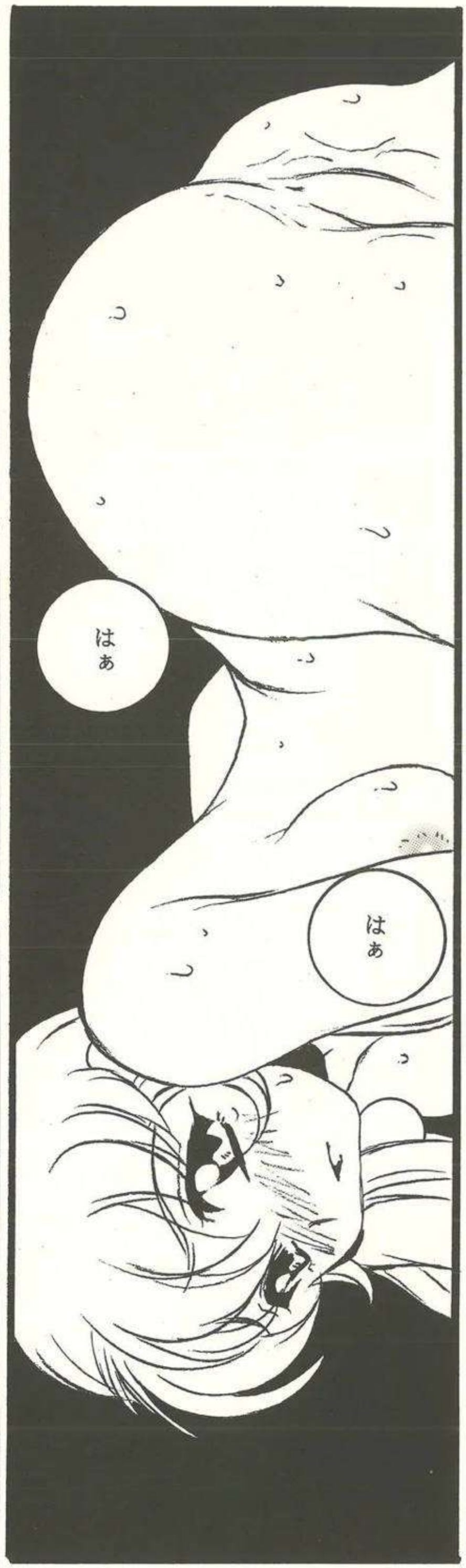
フレアは
誰にも
やらない
俺の
モノだ

フレアの
お尻
こわれちゃう
よぉーっ

うっ！

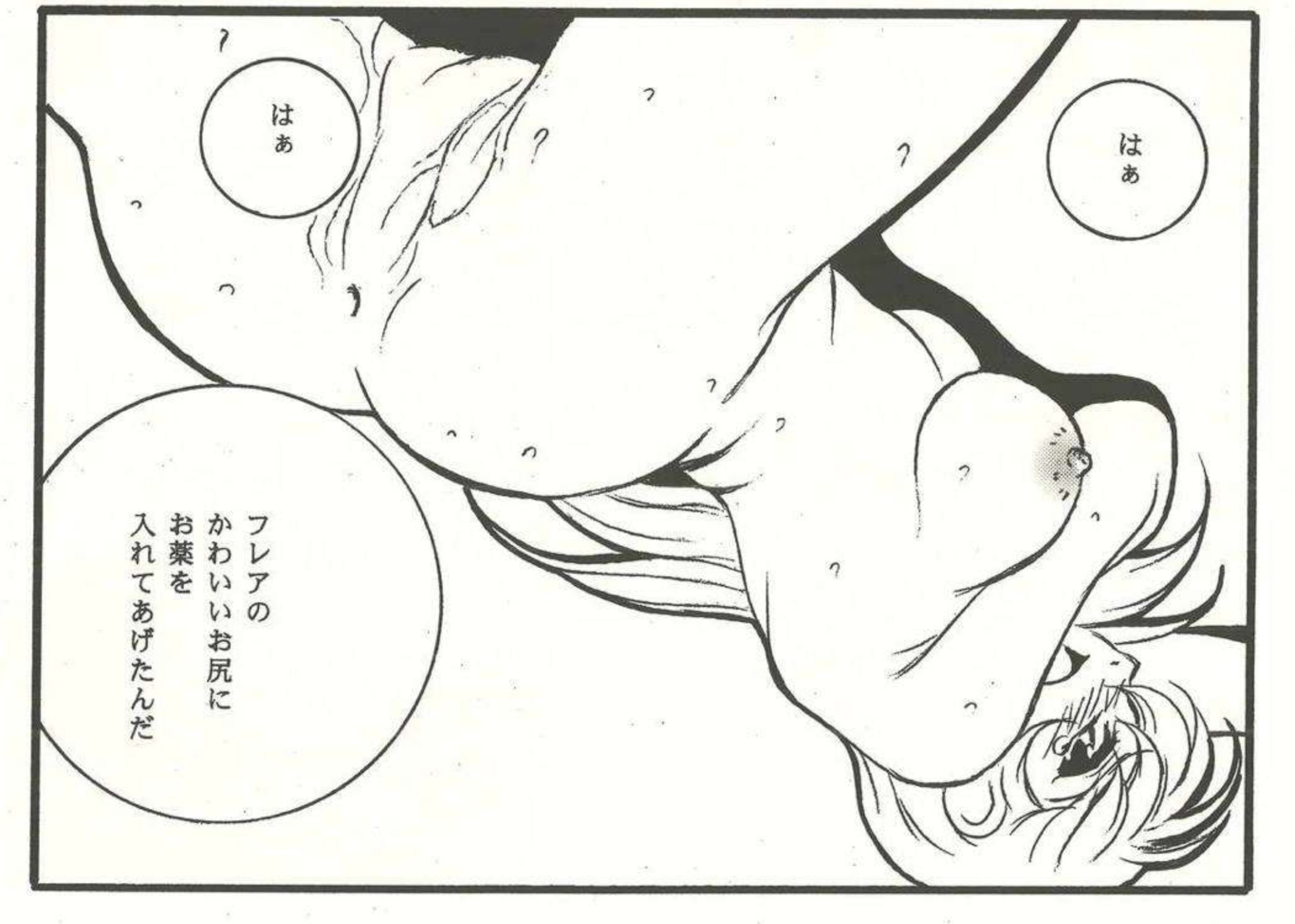
ガキッ
ガキッ
んっ
あぁぁぁーーっ
・・・

いやあ――――っ


はぁ
はぁ

良かったよ
今日は御褒美にもっといい事をしてあげよう

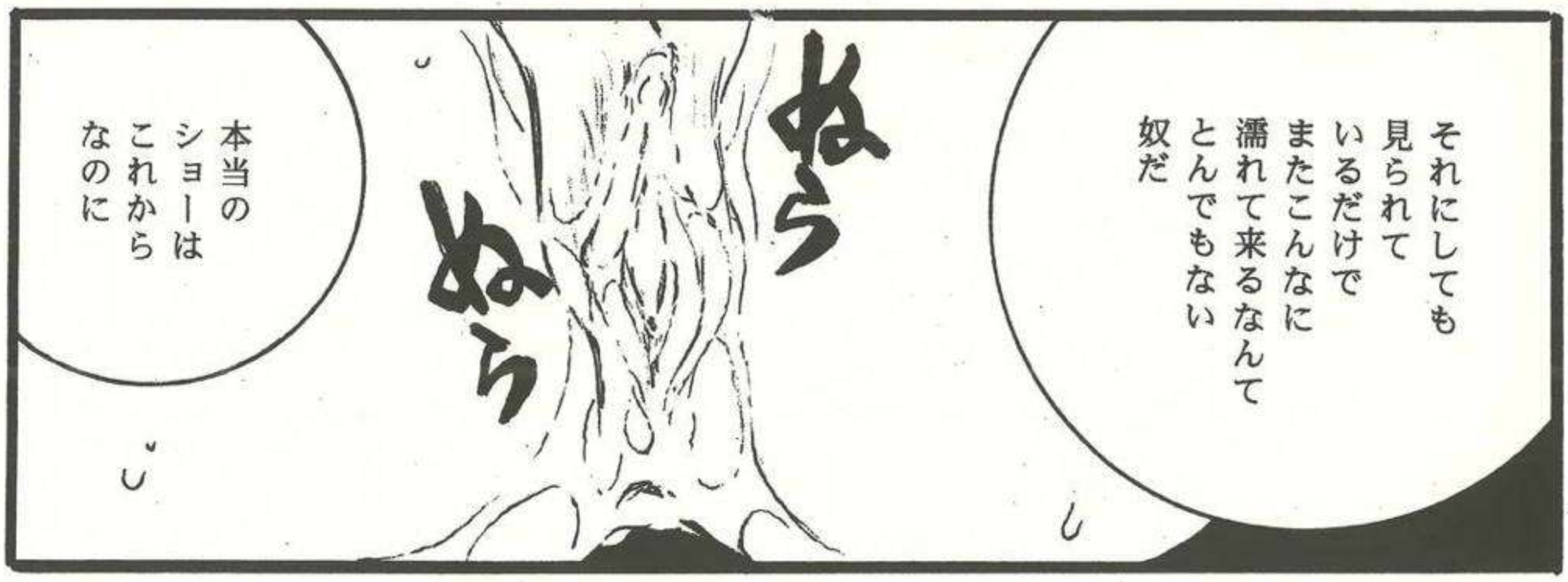
ああ
冷たいっ


冷たいかい？
はぁ
はぁ
フレアの
かわいいお尻に
お薬を
入れてあげたんだ

あぁ
お兄様・・・・
フレア
恥ずかしい・・・

はぁ

はぁ



END

暴虐の宴

深澤さくら

鬱蒼と木々の生い茂る森の中を、ネリスはフレアを探して歩き回った。昼間、久しぶりに通り抜けた街中の雑踏で、ふとした気の緩みからフレアの姿を見失ってしまった。

今夜の宿泊先は次の街と最初から決めていたから、ネリスの姿が見えなければ多分そちらへと向かっているだろう。だが、気まぐれなフレアのことだ。必ずしもそうするとは限らない場合もある。だから、何としても日暮れまでには、追いつきたい。

（ともかく、急がなければ――）

人一人がやっと通り抜けられるような細い道を、早足で進んで行くと、突然、背後から腕を掴まれ、木陰へと引きずり込まれる。声を出す間もなく、大きな掌がネリスの鼻と口を塞いだ。太い腕がネリスを羽交い締めにし、耳元にひどく興奮した様子の吐息が掛かる。

「声を出すなよ……おとなしくしてりゃあ、何も命までは取らねェよ」

鼻も口も塞がれて、息が苦しい。羽交い締めにされたまま、木陰の奥へと引きずられ、そのままの勢いで地べたに転がされる。暗がりに見えるのは、男の影だけで、どんな顔をしているかさえ判別できない。

「うぅ…」

強か打ちつけられた腰が痛み、ネリスの動きが一瞬遅れた。その隙に、男がネリスの鳩尾に拳を一発打ち込んだ。

「ぐぅ…っ」

呻きを上げ、ネリスの身体が地面に沈んだ。

抗う術もなく、ネリスは両手首を掴まれ、再び引きずられた。苦痛の涙が滲んだ視界に、崩れ落ちかけた廃屋が映った。

薄闇の中、男たちの激しい息づかいが響いている。

「――っ！」

我に返ったネリスは、自分を取り囲む三人の男の姿を目にして、瞬時に跳ね起きようとした。だが、両手両足はしっかりと男たちの手で床に押さえつけられ、身動きが取れない。

「な、何を――!?」

「何をって、そりゃ決まってるさ」

男の一人、ネリスの右腕を押さえ込んでいる男がニヤニヤと笑いながら言った。

「存分に楽しませてもらうのさ――」

下肢を押さえ込んでいる男が、片手をネリスの股の間に当てながら下びた笑いを浮かべる。

「――おまえのここで」

男の指が明確な意思を持ってネリスを嬲る。

「あっ…！　いや…っ！」

布越しに敏感な部分を擦られ、ネリスは身を揉んで悲鳴を上げた。

「いやじゃねェだろ」

男の指は執拗にネリスを苛む。股間を嬲る男の指の動きの卑猥さに刺激を受けたのか、ネリスの手を摑んでいた男たちも、負けじと胸元に手を伸ばした。ギュッと力任せに握りしめられ、ネリスのたわわな乳房がいびつに歪む。

その感触に興奮したのか、左腕を摑んでいた男が、奇声を上げてネリスの上着を引き裂いた。透き通るように白い肌が、剝き出しになる。淡いピンク色をした乳うんの中に、豆粒のような乳首が男を誘うように僅かに尖り始めていた。

「いいオッパイしてるじゃねェか」

男は根元からもぎ取るように、片手で乳房を摑んだ。硬く弾力に富んだ摑み具合が快い。

「う…っ」

ネリスは唇を噛みしばって仰け反った。

「へへへ、感じるか？」

男は尚も押し揉み、桜色の愛らしい乳首を絞り出すと、摘まみ上げて転がした。

「コリコリしてきやがったぜ、こいつ」

右腕を摑んでいた男も、同じように残った片方の乳房を弄る。柔らかな膨らみに食い込む男たちの指の力の一つ一つが、ネリスの恐怖心を煽っていく。

「ああ…っ、いやっ！　いやぁぁぁ…っ！」

苦痛と恐怖におののく表情が、また男たちには楽しくてならない。硬直した四肢が恐怖に震え、更に男たちの嗜虐心を煽っていく。

男たちは揉まれる毎に形を変えていく乳房に両側から唇を寄せた。左側の男は乳房をギリギリ摑み上げて、乳首を口に含み、歯を当てた。右側の男は硬く尖りだした乳首に執拗に舌を這わせる。まったく異なる刺激に、ネリスは喉を絞りたてて悲鳴を上げた。雪のような柔肌が薄赤く染まり、両の乳首が痛々しいまでに飛び出して男たちの唾液でベトベトに汚されている。

「ここを揉まれただけで感じるなんて、淫乱な証拠だ」

右側で乳首を舐めしゃぶっていた男が、ふと顔を上げネリスの耳元でいやらしく囁いた。

「きっと下は大洪水になっていやがるぜ」

「だったら、確かめてみよう」

ネリスの下肢を押さえ込みながら、二人の男の暴虐を眺めていた男が、にやつきながら腰に纏った衣服を剝ぎ取りに掛かった。

「…なにするの！　いやっ！　やめてっ！」

暴れるネリスの膝の上に乗り上げ、男は簡単に衣服を引き裂いた。

「いやっ…いやぁぁっ！」

わめきたてるのを無視し、男は一気に下着まで毟り取った。剝き出しにされた秘部は柔らかな繊毛が覆いを取りのぞかれて、一筋一筋震えながら立ち上がった。

「……やめて、見ないで……」

ネリスは腰を捩りながら嗚咽を洩らした。

ふっくらと盛り上がった肉の合わせ目があらわになる。しっ

かりとすり合わせている腿の付け根に押し挟まれて、窮屈そうに羞じらっている。その合わせ目が淡い桜色に充血して、濡れていた。すり合わせている腿の方まで濡れ、なめくじの這ったような滑った光を放っている。

「ベットリだ」

「いやあッ」

「こんなに濡らしていて、何がいや、だよ」

男は笑いながら合わせ目を指で割った。いくら股を窄めても柔らかな肉は男の指が侵入してくるのを防ぐことは出来ない。

「ひ…っ！」

ぬめりとした所を指で掻き回され、ネリスは悲鳴を上げた。

「ほら、見ろ」

濡れた指がネリスの鼻先に擦り付けられた。

「…あ、あぁ……」

「淫乱にはこれだけじゃ足りないだろう」

男は笑いながらそう言うと、いきなり両手でネリスの足を肩に担いだ。

「ひっ…やぁっ！」

一番隠しておきたい場所が男の眼前に晒される。ネリスは必死になって腰を捩った。

少しでも隠したい、そう思わせる心が生んだ咄嗟の行為だった。だが、それは却って男を喜ばせるだけだった。肩に担ぎ上げることによって、ネリスの恥ずかしい部分はすべて晒け出されている。それが腰を捩ることによって、今まで頑に閉じていた合わせ目がぐにゃりと蠢くからだ。

「おお、凄ェぞ」

男はネリスの内腿に手を掛け、より広げさせ、その様を凝視する。

「い…いやっ、ああ、いやあッ」

ネリスは男から逃れようと暴れた。足を振り回し、男の背中を蹴り付ける。男はチッと舌打ちすると、両腕を押さえ込みながら、乳房に食らいついている二人に向かって言った。

「おまえら、こっちに手ェ貸せ」

二人の男は同時に顔を上げると、下びた笑いを浮かべながら頷き、暴れるネリスの足を膝裏からすくい上げた。

両手両足を完全に押さえ込まれ、ネリスは無防備に股間を晒すことになった。M字型に広げられた足の間に、男がうずくまり、じっくりと合わせ目の花びらを嬲りはじめる。

「ひっ…、いやッ……ああぁっ」

男の指で花びらが左右に開かれ、ネリスは声を上げて泣いた。

「何がいやなもんか。おまえのここは涎を垂らして喜んでいやがるぜ」

男は花びらを開き、その花芯を指でそっと撫で上げる。

「いやッ、いやッ……」

息も絶え絶えに泣き悶えつつ、ネリスは全身を震わせた。

「それに、ここもこんなに尖らせて…」

男は割れ目の頂点にある尖りを指で緩やかに撫でた。

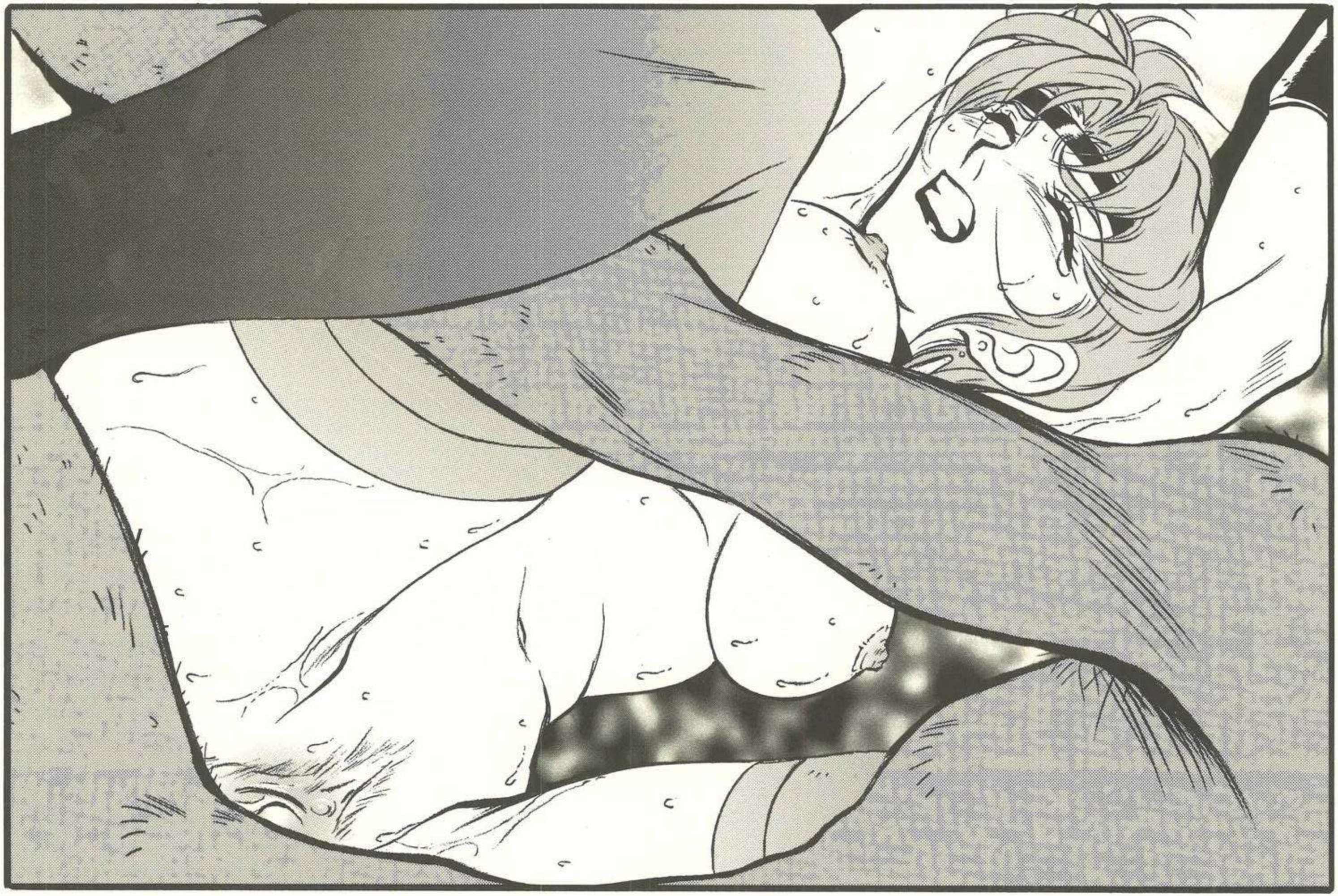
「ひ、あっ…」

敏感な部分を剝き出しにされて、ネリスは腰を捩った。
「十分に感じている証拠だ」
男が笑いながらネリスの顔を覗き込んだ。
「欲しがってんだろ？　ここは…」
指で花びらを割り、中を弄ると、ヌチャッと湿った音がする。
「欲しいって言っちまえよ、正直によ。そうしたらタップリと可愛がってやるぜ」
男が欲望に燃えた眼差しで、ネリスを見る。
「あ…っ、や、やめてっ」
ネリスの悲鳴が引きつった。
「そんなこと言っても、おまえのここが吸いついてくるんだぜ。こんなに熱くして、ピクピクッてな」
指で秘肉をまさぐる男は、尚も深く指を埋め込む。差し込まれた指が、ネリスを嬲るようにくちゃくちゃと掻き回される。その指の動きのおぞましさに、ネリスの肌には脂汗が浮かんでくる。
「ああ……」
「まったく、もの凄い濡れようだぜ。ほら」
男が愛液にまみれた指を抜き出し、ネリスの両の乳房にそのねっとりとした証をなすりつける。すると両側にいる男たちが待ってましたとばかりに舌を這わせてくる。
ぬらぬらとした愛液に濡れた乳首が、たちまちの内に男たちの舌で舐め尽くされ、硬く尖る。
「ひっ…ん、あぁ…っ」

尖りきってツンと立ち上がった乳首を、片方は指で捏ねられ、もう片方は歯で甘噛みされる。異なる刺激に、押さえつけられたネリスの背が撓る。
「あ、あああ…っ！」
たまぎる悲鳴が響いた。
堪えきれない快感がネリスの身体を駆けめぐる。
突然、見も知らぬ男たちに暴力で犯されているのに、感じてしまっている。
そんな自分が悲しかった。惨めだった。それでも必死になってネリスは抵抗する。
「もうこっちはドロドロになってやがる」
花芯を嬲っている男が、そう言いながら震える狭間を指で開き、そのあわいを舌で舐め上げる。
「ひいっ…、いやぁっ」
身を揉んで逃れようとするネリスの腰をガッチリと摑み、男は鼻面をその狭間に押し当てると、舌の先でおののく花芯をくすぐった。
「…お願い、やめて……」
乳首を嬲られ、急所を脅かされる恐ろしさに、ネリスの悲鳴が上擦り、全身が強張る。
その間も男たちの無骨な指は、ネリスの身体の隅々まで暴きたてるように這い回る。
（この身は剣聖ラグエルに、そして、その継承者であるフレアに捧げた筈だったのに……何故、こんなことになってしまった

のだろう……）
新たに盛り上がってきた涙が、一筋、ネリスの頬を伝って落ちた。
ふいに、花芯を嬲っていた男が顔を上げた。
「もう堪らねェ」
男は身を起こし自分の前を寛げると、隆々と天を突き上げるほどに怒張したものを摑みだした。先端はもうすでに欲望の滴りでヌラヌラと濡れ光っている。
「今からこれをぶち込んでやるからな」
男は更に欲望を掻き立てるように自らの逸物を扱いた。
「……っ」
屹立したものを見せつけられ、ネリスは声も出せぬほどおのいた。
到底自分の中に収めきれるとは思えないほど、それは太く大きかった。
両側でネリスを押さえ込んでいる男たちが、挿入しやすくなるように、ネリスの両足を抱え上げ、大きく開いた。
「ああ、いや…っ」
ネリスは我に却って髪を振り乱し、哀願する。
男はそんなネリスに構わず腰を寄せてくる。先端で花芯を擦り上げられ、ネリスはヒッと仰け反った。
秘肉がヒクッと締まり、蜜がトロリと溢れ出る。
男はその蜜を先端に塗り込めるようにして秘肉の周りをつついた。

「いやっ、いやっ…いやぁぁっ！」
ネリスは必死の形相で腰をずり上げ、逃げようとした。だが、男たちの屈強な腕に阻まれ、身動きすることすら出来ない。
「やめてェッ…しないでっ！」
先端をあてがわれ、ネリスは泣き叫んだ。
「こんなになってるくせに、今更何を言いやがる」
嬲るように小突きながら、男が笑った。
ネリスは固く目を瞑った。目を瞑ると、押し当てられているものの感覚が強まった。
「う…、あ…っ」
圧力が更に加わり、じわじわと押し広げらる感覚に、ネリスは喉を反り上げて呻いた。ズズッと頭が入ってくる。膨らみきった先端は、ネリスの中でドクンッと大きく脈打つ。
「く、ぅっ」
処女を破られるような恐怖と、女の快感が複雑に絡み合い、ネリスは声を殺して泣いた。
男は犯される辛さをたっぷりと味わわせるように、ゆっくりと沈めてくる。
得も言われぬ味わいの肉だ。ただ突っ込んで嬲るだけではつまらない。思う存分、啼き善がらせてこそ、自分たちも楽しめるのだ。
「どうだ？」
根元近くまで埋めて、男は訊いた。先端はすでに子宮口まで到達している。



「……」
ネリスはふいごのような息づかいになりながらも、じっと身を固くしている。
「なら、これはどうだ？」
男は小刻みに腰を動かし、子宮口を突き上げてみた。
「あ…っ」
途端にネリスが狼狽した声を上げた。
「もう観念して楽しんだらどうだ？」
男はネリスの啼き声に気を良くして、何度もそこを突き上げてくる。
「く…っ」
ネリスは大きく腰を揺すられながらも、必死になって声を噛み殺している。応えまいと力んでいる。
だが、いっぱいに満たされ、擦りたてられ、抉り抜かれ、突き上げられることで生じる快感を堪えきることは出来なかった。男の力強い突きによって、次第に頬に血を昇らせ、息づかいが乱れてくる。後から後から汗が吹き出し、全身が水を被ったようにビッショリと濡れている。
「まだ、我慢するか？」
男は巧みに責めたてながら笑った。汗に光る肌に手を伸ばし、ふいごのように上下する腹から胸を撫で回した。
入れ違いに右の足を抱えていた男の指が、ネリスのすっかり剝き上がった花芯を嬲る。
両の乳房を男たちに弄ばれ、身体の奥深くを男に抜き差しされながら、嬲られたのだ。
「ヒィ…ッ！」
たちまちネリスの腰は踊るように跳ね、仰け反らした喉からは悲鳴が迸った。
「ひ、ああ…っ」
昂った声が咳を切って溢れた。男を咥え込んだ秘肉が急に精気を帯びて粒立ち、締めつけてきた。
「おぉっ！　いいぞ！」
男は両足をガッシリと抱き、激しく腰を突き動かした。
「ああ……だめっ……」
ネリスは弓なりになって腰を振り立てていた。次第に突き上げる男との動きが合ってくる。
「凄ェッ！　キリキリ締めつけてきやがる…」
男が腰をより激しく突き動かした。合わせ目からは愛液がしとどに溢れてきて、男の腰の動きに合わせてジュプジュプッと濡れた音をたてている。
「くそっ！」
男が呻き、一際大きく腰を突き上げる。
「ん、あ…っ」
ネリスが応えるように腰をうねらせる。
「うおぉっ！」
男は咆哮しながら、腰を震わせた。ドクッドクッと叩きつけるような飛沫が、ネリスの中に迸った。
「あぁ……っ」

飛沫を奥深くに受け、ネリスの中が激しく震えると、最後の一滴まで搾り取るように、きつく男の屹立を咥込む。その締めつけの良さに呆然としている男を押し退け、左側にいた男がネリスの足元に跪いた。

「次は俺の番だ！」

叫ぶや否や、まだ収縮を繰り返しているネリスの秘肉を分け入るようにして、漲った猛りを押しつけてくる。

「うおおっ！　こいつは凄ェ！」

先端を埋め込むと、男はせっせと腰を使い始めた。

「おまえのデカマラでガバガバになってるかと思ったら、なんてェ締めつけ方だ」

与太を飛ばしつつ、それでも必死の形相で激しく抽挿を繰り返す。

一人取り残された男が歯噛みしながら、繋がった男の尻を蹴り上げた。

「いいから、とっとと済ませろ。次は俺の番だからな！」

怒張した昂りを扱きつつ、唸る。

相手が代わり、新たに深く突き入れられているネリスは呆然とした眼差しで自らを扱いている男を見上げていた。

「お、そうだ。おまえ身体を起こせよ」

ネリスの顔を見下ろしながら、怒張を扱いている男がニヤリとした。

「何だ？」

必死になって突きまくっている男が鬱陶しげに、傍らの男を見上げた。

「おまえがイクまで、こいつに咥えさせよう」

ネリスの可憐な唇に視線を当てて、男が淫蕩な笑みを浮かべる。

「よしっ！」

秘肉を貪っていた男が、ネリスの身体を抱き上げ、身を起こした。繋がった部分がヌプッと音を立てる。

「やめてっ！　そんな……」

暴れるネリスを胡座の膝に跨がせる。グイと腰を抱き込まれ、男の怒張が奥深くまで突き刺さる。

「ひ…イィッ！」

ネリスは大きく仰け反った。男の大きく広がったエラで、爛れたようになっている秘肉を擦り上げられたのだ。

仰け反った顎をグイッと横向きにされ、立ち上がった男が漲った屹立をネリスの唇に捻じ入れる。

「む…っ、ん、ぐっ」

無理やり唇を割られ、新しい男の怒張を咥えさせられる。

悲鳴を上げようとしても男の昂りがそれを阻む。

「んん…っ」

ネリスは鼻を鳴らし、頭を振りたて男の怒張を吐き出そうとした。

だが、男がそんな行為を許そうとする訳がない。それどころか、喉奥深くまで押し入ってくる。拒もうとしたネリスの身体が固く強張る。同時にネリスは体内にいる男の怒張をきつく食

い締めていた。
「うおおぉぉっ」
激しい締めつけに男が雄叫びを上げ、激しく腰を突き上げてくる。
「う…っ、んんっ」
美しい眉を寄せ、口に含まされた苦しさをあらわにしながら、ネリスは力なく揺さぶられた。頭の中が虚ろになっていく。もう何も考えられなかった。今のネリスに出来ることは、何もかも忘れ、ただ、この激しい凌辱の時が過ぎ去ってくれるのを待つことだけだった。
胃の腑を突き上げ、粘膜を擦り立てられる感覚だけに領されて、呻きのたうつ。
一番最初に欲望を吐き出していた男の目が、そんなネリスの後ろ姿を食い入るように見つめていた。
男は仲間の股ぐらに跨がり、大きく尻を揺さぶっているネリスの姿が、積極的に楽しみを求めているようにしか見えなかった。他の男の怒張を上下の口で咥え込み、くぐもった悲鳴を上げているのを見て、再び股間を熱く漲らせていた。
男はネリスの腰を抱き込んでいる仲間の側に行って、そっと耳打ちした。ネリスの中にいる男は頷いて、仰向けに寝転んだ。
「ひ…っ！」
その途端、塞がれたネリスの喉から鋭い悲鳴が上がった。一緒に倒れ込もうとするのを、ネリスの口を犯している男が押し止めた。

ネリスは寝転んだ男の身体の上に馬乗りになった恰好だ。豊かな尻の狭間に咥え込んだ男のものが沈んでいるのが、後ろに下がった男の目にハッキリ見える。下になった男が手を伸ばしてネリスの乳房を掴み上げる。たわわな乳房を力任せに鷲掴み、飛び出した乳首を親指で撫で擦る。
「ん…っ、んんっ」
塞がれた唇から僅かな喘ぎが洩れてくる。奇妙な形に繋がった三人の肌は、吹き出す汗で濡れていた。
不思議なオブジェが、一人、自らの股間を扱いている男の目に映った。
「そら、もっと腰を使えよ」
下になった男が楽しそうに突き上げてくる。
「ふ…っ、む…」
「歯を当てるなよ。もっと舌を動かして先を舐めろ」
唇を犯している男が、ネリスの頭を掴み固定し、思う存分捻じ込んでくる。
「う、うぐ、う…んっ」
頭を振られて、ネリスは鼻から泣き声を噴き零した。
そのたどたどしさが、却って刺激になった。自分のものを持て余し気味に咥えて呻き泣いている顔が、これまた大いに男を楽しませる。
「堪らねェな。もうイッちまいそうだ」
髪を掴んで男が激しく腰を使いだす。
「俺もだ」

下から突き上げる男も、呻きながら言った。
「まぁ待て」
そんな様子を眺めていた男が、激しく腰を使いだした二人の仲間を制しながら言った。
「俺にもっといい考えがある」
スパートを掛けようとしていた最中に制された男たちが、不満たらたらの表情で、残った男を見た。
「何も突っ込む穴は一つだけじゃねェからな。ここに美味そうな穴があるってことだよ」
男はネリスの揺れる尻を掴み、叩きながら告げた。
「まず俺がここをタップリと濡らしておいてやる。おまえはここを使ったらいいさ」
男は白い尻の窄みに舌を寄せながら言った。
「中で薄い壁越しに擦り合わせるなんてのは、堪らなくイイって言ってたからな」
恐ろしい男の言葉に、ネリスは全身をおののかせた。
「おおっと」
口を犯していた男が慌てて怒張を抜き出した。恐怖に震えるネリスの歯で傷つけられては堪らないからだ。
代わりにその怒張でネリスの頬を叩いた。唾液と先走りの液がタップリと塗られた男の怒張が、柔らかな頬をビタンッと打つと粘った糸を引く。それは、すっかり呆けたような顔をしているネリスの頬に、淫猥な彩りを添えた。
「ほらほらっ」

男は面白がって、尚も粘りをネリスの頬に、唇に押しつける。その間に尻をまさぐっていた男が、その蕾に舌を這わせた。
「ひ…っ!」
そのぬめっとした感触に、痴呆のように虚脱していたネリスに正気を取り戻させた。
「あ…いやっ…いやぁぁっ!」
上体を前に倒してネリスが逃げようとする。だが却ってその恰好は尻を嬲る男にとっては好都合だった。
逃げまどうネリスの尻たぶを両手で鷲掴み、しっかりと固定させると、思うさま舌を翻した。弁の男を未だ繋がったままの花芯から溢れ出てくる愛液も、指で掬って塗り込める。たちまちネリスの蕾は男の唾液と自ら零した愛液でしとどに濡れた。
「や…っ、あぁ…いや、止してェ!」
それでも逃げようとするネリスは、口を犯していた男に思い切り頬を張られた。
「今更、じたばたするんじゃねェよ」
下になった男の胸の上に崩れ落ちて、ネリスは涙を零した。
「う…っ、うう…っ」
相変わらず高く掲げられたままの尻の窄みは、男の舌が這い回り、ぺちゃぺちゃと湿った音を響かせている。
「あぅ…や…っ」
男の指が襞を捲りあげ、舌先が中まで潤すかのように蠢かされる。徐々に解きほぐされてくる窄みが、ヒクヒクと羞じらうように震える。

「ひ…っ！」
突然、男の指が奥深くまで侵入してきた。
「あ…やぁ…っ、そこ、やめ…っ」
身体の中で薄い壁を隔てて、前に咥え込んだ逸物と後ろに挿し入れられた指とが擦り合わされる。
堪らない感覚に、ネリスは頭を振りながら叫んでいた。
「やっあぁぁっっ」
「そんなにいいのか、これが…」
男は指先に繊細さを加えた。前から止めどなく噴き出してくる愛液を指に掬って塗り付け、ぬるぬるにしておいて優しく撫でられる。と同時に花芯に挿された肉棒が、グッと強く張って抉ってくるのだ。
「あああああっ！」
忽ちネリスは錯乱状態に陥った。三人の男に代わる代わる続けざまに犯された後だ。気力も、体力も、萎えきって感覚すらなくなりかかっているのを、更に掻き立てられる辛さは狂いだす寸前だった。
だが、女の業か、そんな中でさえ、肉は徐々に悦びを噛み締め、のめり込んでいってしまう。
それは苦痛に近い快楽だった。耐えがたい、だが、今までに味わったことのない、極上の愉悦だった。
「もう、許して……ああぁっ」
ネリスは髪を振り乱して、苦しみと悦びに汗みずくになって白い身体を捩り立てる。

「ほら、行け！」
尻を嬲っていた男が前に回り、交代するように口を犯していた男が背後からネリスの尻に欲望を突き込んだ。
「ひっ…！　ああ…っ！」
滾るような熱を前と後ろに二本も咥え込み、ネリスは悲鳴を迸らせた。
「うおっ！」
後ろの蕾に突き入れた男が、余りのきつさに吠えた。
「くそ…っ」
前を犯している男も、連動した締めつけに歯を噛み締め、悦楽に耐えた。
薄い肉壁越しに擦れ合わさる感覚が何とも応えられないほどいい。
互いの熱と、擦れ合いによって感じる感触。そして双方とも貪欲に呑み込もうとするネリスの締め付け。
予想を遙かに越えた快楽を満悦するために、男たちは唸った。
「あ、はぁ…っ」
ネリスは身体中を渦巻く熱に煽られ、大きく口を開いた。
体内にこもる熱を開放しなければ、耐えられない。
その隙を狙うように、もう一人の男が、口に熱い滾りをぶち込んできた。
「む…っ、くぅ…」
ネリスは鼻を鳴らしてそれを咥えた。
今ではネリスは男の欲望の処理場所と化していた。身体中の

受け入れられる箇所すべてに男を咥え込んでいる。
もう何も見えない。感じない。
自分が今、どんな貌を曝しているのかさえも、気にならない。
飢えた獣が餌を貪り食うように、ただ与えられる快楽を貪るだけだ。
あれほど怯えていた男たちの逞しさが、やっと咥え込んでいるその巨大さが、自分の中を我が物顔に抉り抜いている。そのことだけが意識された。
腰から下が痺れきっている。ただ貫かれた前後の肉襞が灼かれるように熱い。その感覚は揺さぶられる毎に高まり、啼き声と悲鳴がごっちゃになって口から迸る。
抉られる部分を思い切り引き絞り、自らも快楽を追い求める。花芯から、尻の蕾から、そして新たに犯されている唇から、淫靡な音を響かせ、身も世もなく悶える。
「…んっ、ぐぅっ」
半死半生の態で揺さぶられながら、ネリスは喉奥からくぐもった呻きを絞り出す。
男たちもそれぞれに激しく締めつけられ、咆哮を上げている。汗が首筋を、鳩尾を、そして腹を滴り、男たちによって開かれた肉体をねっとりと光らせている。
内股がピンと攣ってブルブル震えだした。
「む…っ、んっ」
きつく眉を寄せている表情は、愉悦というよりは苦悶に近い。額に頬にほつれた毛をベットリと張りつかせ、口に含んだ男のものを舌で必死になって吸い上げる。
「ふ…っ、んあ…っ」
汗みずくの裸体が捩れ、激しく痙攣する。その動きに合わせるように、狭間や唇に深々と抉り込まれた男たちの黒々とした剛直が、ビクッ、ビクッ、と脈動を見せた。
突き上げられるように、ネリスの背が撓った。
男たちの精液を全て咥え込んだ所に射込まれ、ネリスは断末魔さながらの呻きを絞り出して、崩れ落ちた。
体内に、口中に射込まれた夥しい精液が溢れ出て、ネリスの桜色に上気した裸体を彩る。
完全に意識を飛ばしたネリスの面差しは、苛まれ、凌辱され尽くした女の艶を映し出していた。

END

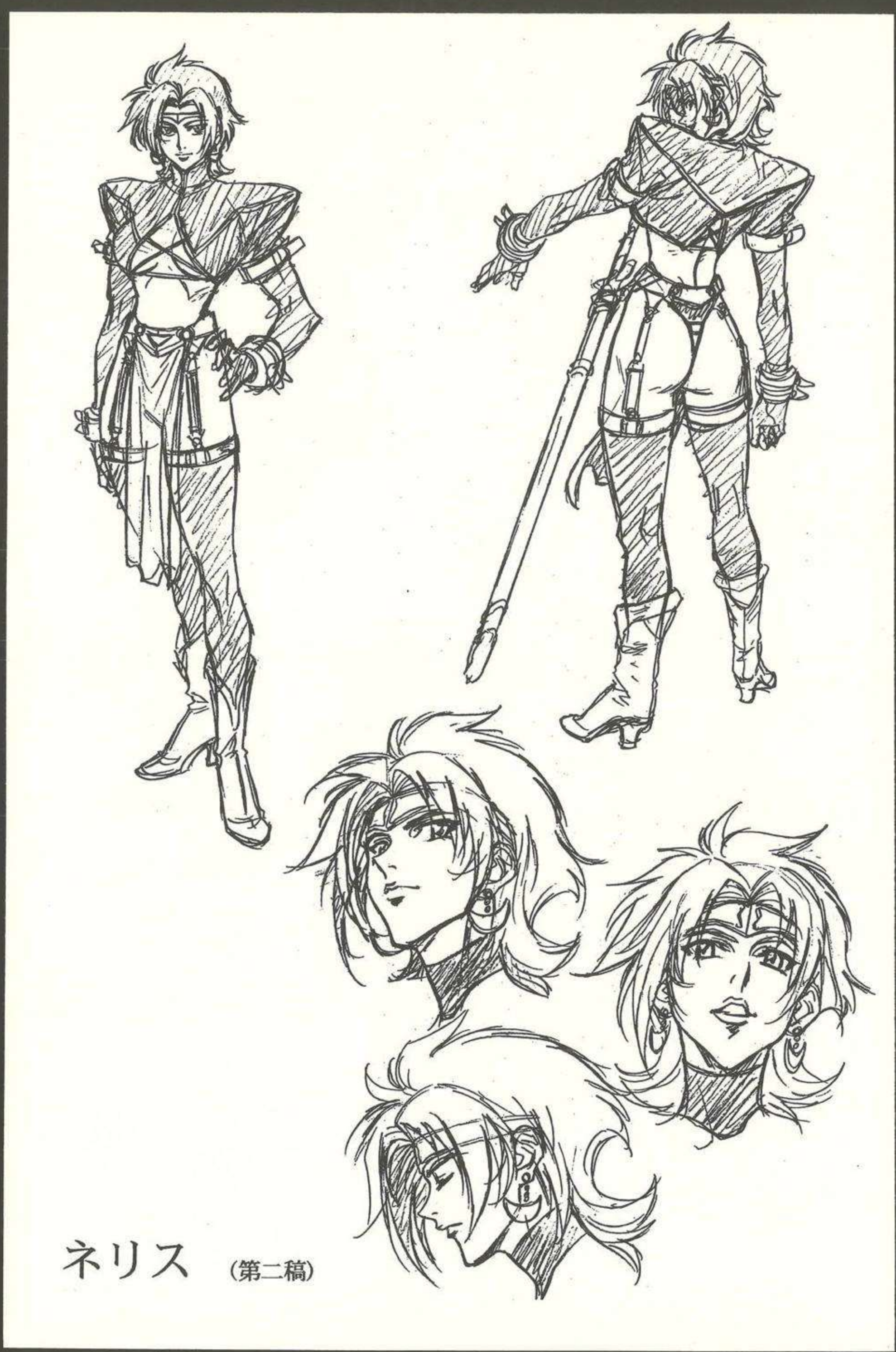
オリジナルアニメーション

新リヨン伝説／外伝

製作準備中！！

◎ここでは２００１年秋、始動予定で進んでいるオリジナルアニメ“新リヨン伝説“で使われる新着デザインと共にイメージイラストの一部をご紹介したいと思います。

ネリス　(第三稿)　○戦う女剣士を前面に出そうと言う。
内田氏のイメージラフと要望を受けて

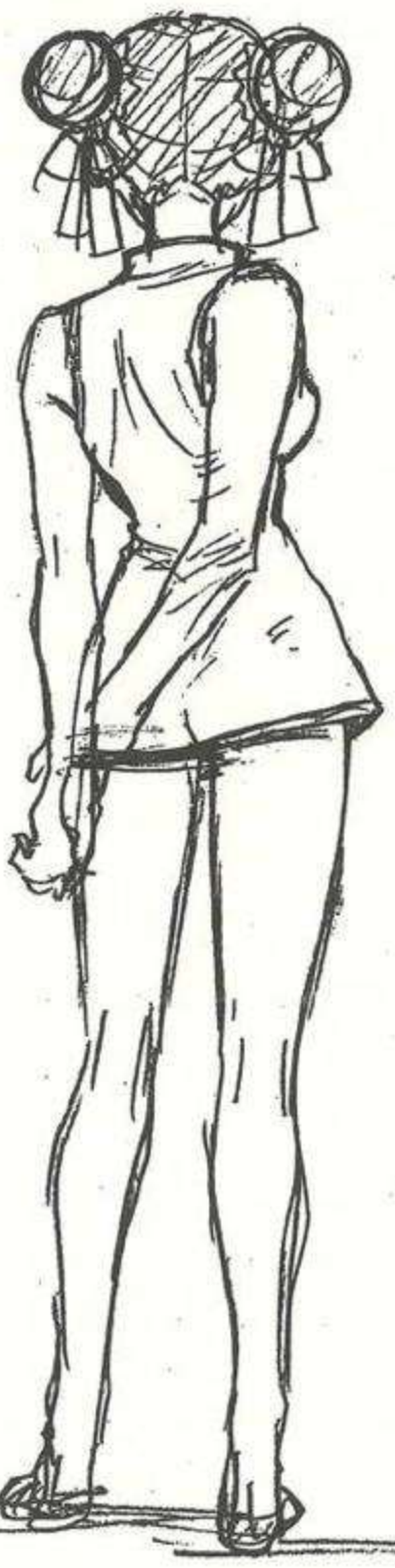


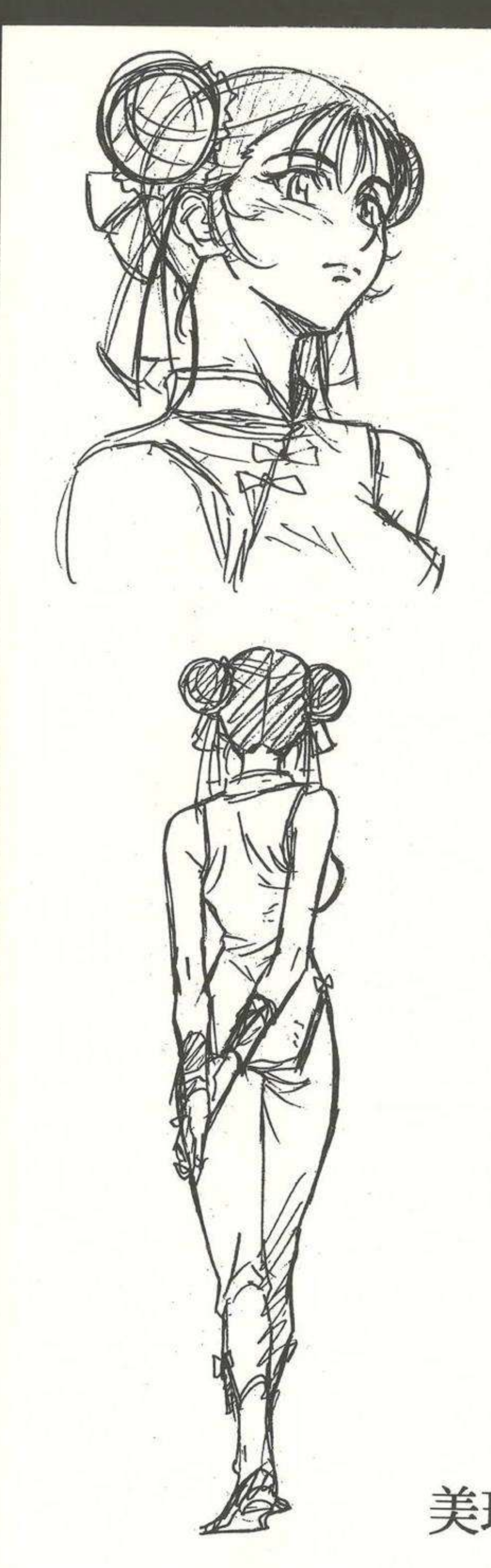
ネリス (第二稿)

ジーク ○今回のジークは荒々しい男のイメージらしい

美瑠

（第二稿）　○もっと幼く。と言う要望により



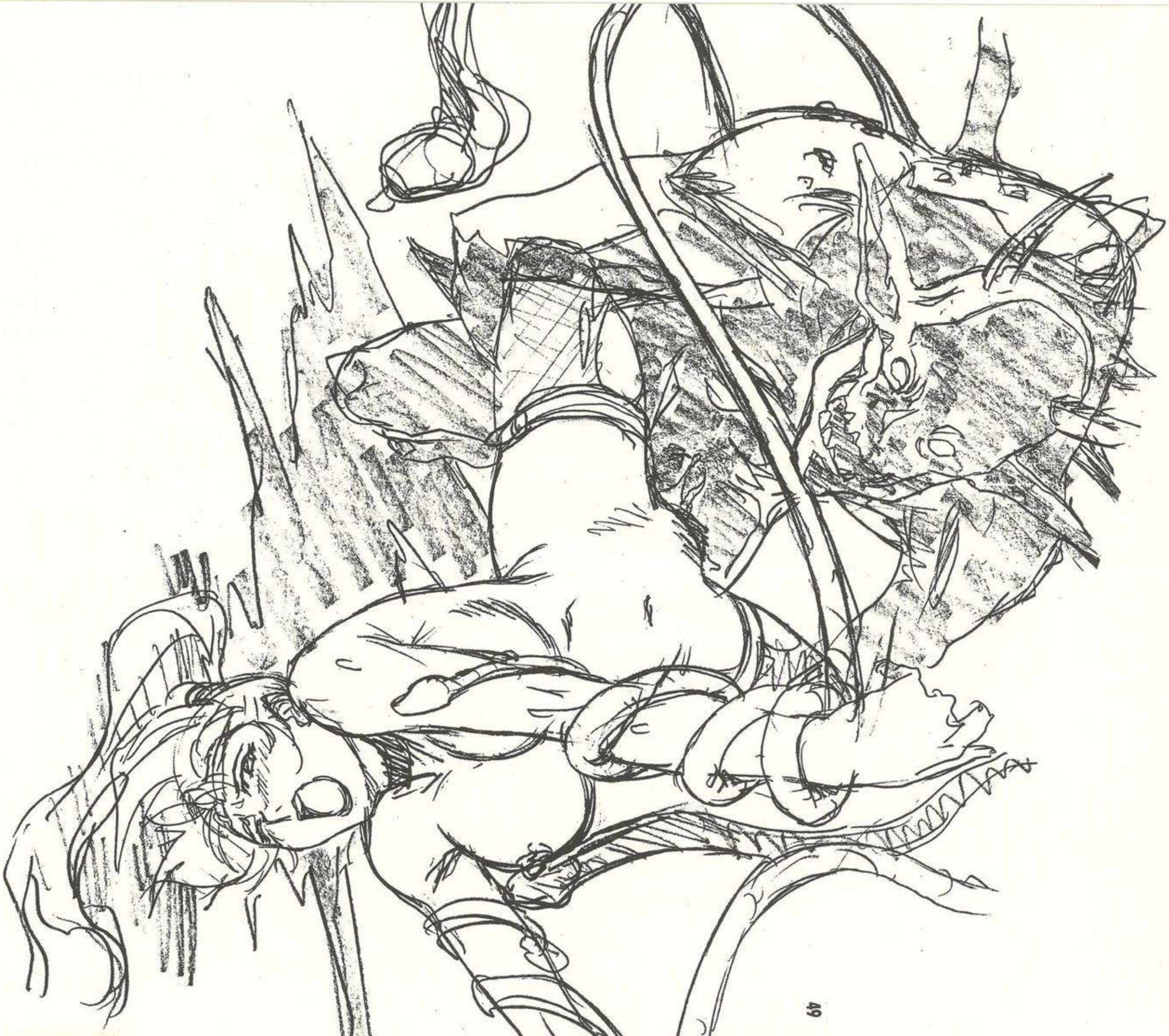


美瑠 (第一稿)

新リヨン伝説／外伝

イラストギャラリー

イラスト／鈴木　竜也



真リヨン伝V

冬コミには出るぞ！（発行が思いっきり遅れたけどね。）

ラ・ピアス2

POSTSCRIPT

“裏リヨン伝“如何だったでしょうか？本来のコンセプト通りには出来なかったのは残念ですが次のイベントには後悔なき本作り、また更なるHを目指し精進する所存でありますので見捨てないでね。次は冬コミで会いましょう。最後に今回お忙しい中協力して下さった深澤さん、中山さん本当にありがとうございました。

海堂　司

COLOPHON

裏リヨン伝

発行日／２００１・８・１２

発行　／スタジオMAX

連絡先／〒１８７－００４１
東京都小平市美園町１－７－１９
中丸ビル３０２

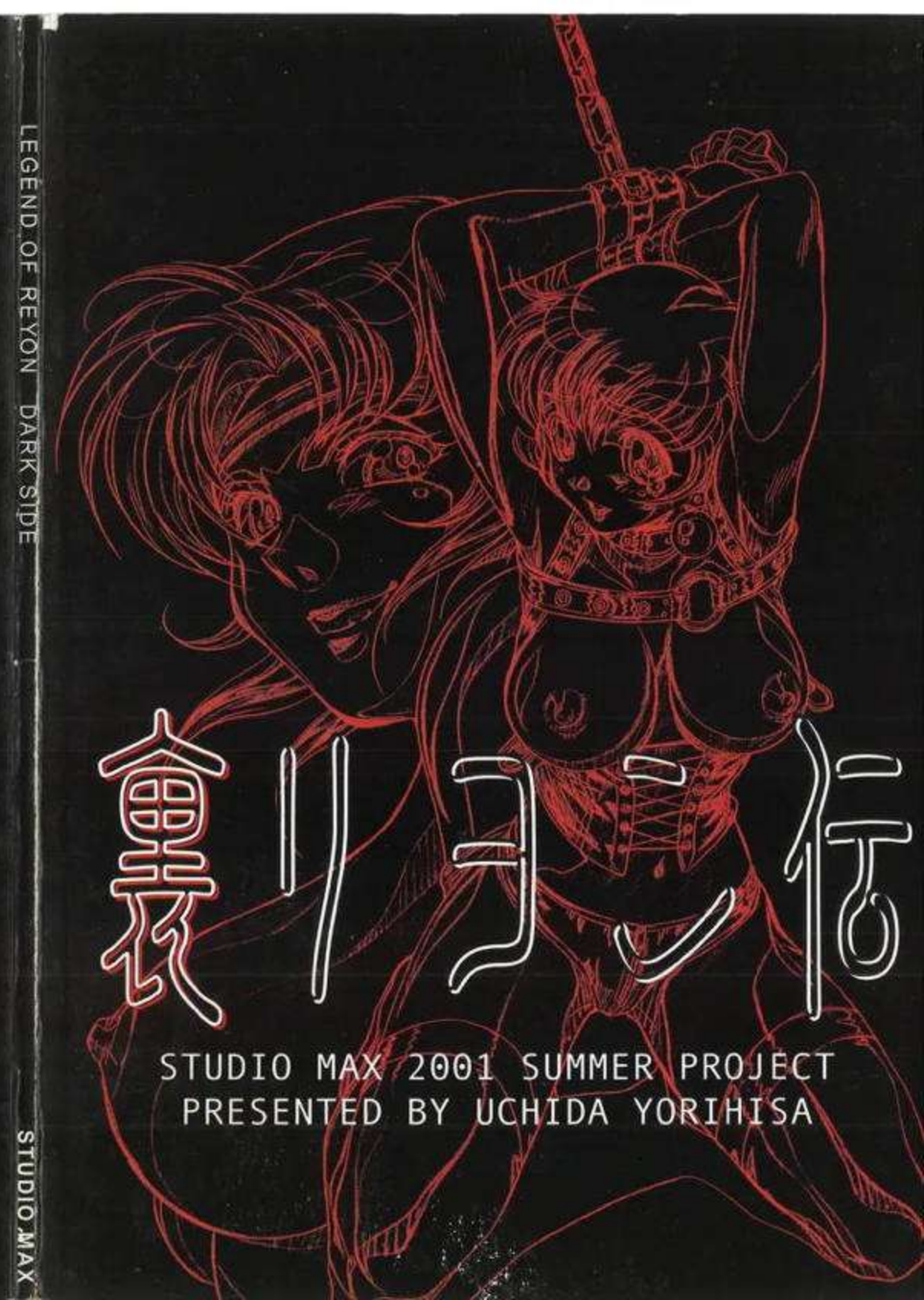
印刷　／金沢印刷　様

表紙　／内田順久

仕上げ／中山久美子

禁・無断転載

STUDIO MAX 2001 SUMMER PROJECT
PRESENTED BY UCHIDA YORIHISA

LEGEND OF REYON DARK SIDE

STUDIO MAX